

道徳律

シェルドンがロータリーの中で最も輝いていた時期に、Sheldonism が誰でも理解できるように、シェルドン・スクールの卒業生たちが皆で作上げたのが「ロータリー道徳律」です。



ガイ・カンデカー

1916年に、ガイ・カンデカーがその全文を「ロータリーの心得 A Talking Knowledge of Rotary」に収録して、全会員に配られました。

11条から成るこの条文の1条1条には Sheldonism の各論が端的に述べられています。

第1条 自分の職業は価値あるものであり、社会に奉仕する絶好の機会を与えられたものである。

第2条 自己改善を図り、実力を培い、奉仕を広げること。それによって、**he profits most who serves best** というロータリーの基本原則を実証すること。

ロータリーの例会を通じて、お互いに職業上の発想の交換をしながら、他人の事業上の取り組み方を参考にして自己改善を図ります。もしも自分の職業態度に問題があれば、それを正さなければなりません。その結果、経営能力が高まって、**He profits most who serves best** の成果を、自分の事業所で実証することができるのです。

第3条 自分は企業経営者であり、成功したいという大志を抱いていることを自覚すること。しかし、道徳を重んじる人間であり、最高の正義と道徳に基づかない成功は、まったく望まないこと。



道徳律

経営者として、自分の事業を成功させよう考えることは当然のことですが、正義と道徳に基づかない事業の発展を望んではなりません。

第4条 自分の商品、サービス、アイデアを金銭と交換する場合、すべての関係者がその交換によって利益を受ける場合に限り、合法的かつ道徳的であると考えること。

商取引の原点は等価による物々交換であり、それが貨幣を介した交換に変わった時点で、利益という概念が入ったわけです。従って、買った者も売った者も、共に満足しなければ商売は成立しないはずで

第5条 自分が従事している職業の倫理基準を高めるために最善を尽くすこと。そして、自分の仕事のやり方が、賢明であり、利益をもたらすものであり、自分の実例に倣うことが幸福をもたらすことを、他の同業者に悟らせること。

第6条 自分の同業者と同等またはそれに優る完全なサービスをする心を心がけて、事業を行うこと。やり方に疑いがある場合は、負担や義務の厳密な範囲を越えて、サービスを付け加えること。

自分が提供した商品や技術は、商法上や民法上の期限を越えて、一生責任を持ちなさいということで、現在の製造物責任法すなわちPL法を先取りしたものです。しかし、これを忠実に守れば、会社は潰れる可能性があるという反発が出て、その後この道徳律が廃止される一つの原因になりました。

第7条 職業人にとって最も大きい財産の一つこそ、友人であり、友情を通じて得られたものこそ、卓越した倫理にかなった正当なもの

であることを理解すること。

自分が利益を得るために、友人との信頼関係を利用してはなりません。

第 8 条 真の友人はお互いに何も要求するものではない。利益のために友人関係の信頼を濫用することは、ロータリーの精神に相容れず、道徳律を冒瀆するものであると考えること。

第 9 条 社会秩序の上で、他人が絶対に否定するような機会を不正に利用することによって、非合法的または非道徳的な個人的成功を望んではならない。成功するために、他の人たちから道徳的に疑われるような機会を利用してはならない。

第 10 条 他のすべての人以上に、同僚であるロータリアンに義務を負うべきではない。ロータリーの神髄は競争ではなくて協力にある。ロータリーでは、決して狭い視野を持つてはならず、人権はロータリー・クラブのみに限定されるものではなく、人類そのものに深く広く存在するものであることを断言する。さらに、ロータリーは、これらの高い目標に向かって、すべての人やすべての組織を教育するために、存在するのである。

ロータリアンだという理由で特別な配慮をしてはならないし、期待してはなりません。ロータリーの創立当初は、物質的相互扶助として、これが行われていましたが、1913 年を以って決別したはずです。

第 8 条と共に、当時広く行われていたロータリアン同士の割引販売を禁止し、ロータリアンも非ロータリアンも公平に扱うことを説いたものです。

第 11 条 最後に、**he profits most who serves best**」という黄金律の普遍性を信じ、すべての人に地球上の天然資源を機会均等に分け与えられた時に、社会が最もよく保たれることを主張するものである。

この第 11 条は、シェルドン・スクールの優等生であったジョン・ナ

トソンがドイツ語で書き上げたものです。この文章がマタイ伝から引用されたものであり、宗教色が強いという理由で、この道徳律そのものが使用停止になる原因の一つになりました。しかし、世界の全宗教に同じような考え方が記載されていることを考えれば、この言葉こそが奉仕理念の原点かも知れません。



ちなみにビビアン・カーターが書いた **Meaning of Rotary** には黄金律に関して、次のような記述があります。

- ・ エジプト人は、「他人のために良かれと自らが望んだことを探し求め、それをしてあげなさい」と表現している。
- ・ ペルシャ人は、「あなたが人からしてもらいたいことを、人にしてあげなさい」と言っている。
- ・ 仏陀は、「他人の幸せを、自ら望んで探し求めなさい」と述べている。
- ・ 中国の哲学者は、「あなた自身が望まないことを、他人にしてはならない」と言っている。
- ・ モハメットは、「あなたがしてもらいたくないような方法で、あなたの兄弟たちを扱ってはならない」と命じている。
- ・ ギリシャ人は、「隣人から敵意を抱かせるようなことをしてはならない」と助言している。
- ・ ローマ人は、「すべての人が心に刻み込んでおかなければならない法律とは、あなた自身の社会の人たちを愛することである」と書いている。
- ・ モーゼの律法には、「あなたが隣人からしてもらいたくないことを、隣人にしてはならない」と書かれており、これだけが唯一の戒で

あって、その他のものは単なる解説に過ぎない。

- ・ ナザレのイエスは、「すべて人にせられんと思うことは、他人にもその通りにせよ」と勧めている。

即ち仏教、儒教、コーラン、ユダヤ教などにも全く同じ表現が使われていますので、黄金律は宗教ではなく、全世界の人類を拘束する哲学的な戒律だと解釈すべきでしょう。



道德律が作られた 1915 年当時はまだ経済規模が小さく、ほとんどの事業所は資本家が経営者を兼ねている時代でした。従ってロータリーの奉仕理念は経営者であるロータリアンの意志によって素直に事業経営に反映されたものと思われます。

ロータリアン自身が同業組合に入って、すなわち医者は医師会に、飲食店は食品関係の業界団体に入って、その業界の指導的立場になって、その業界に道德律を広める活動が活発に行われます。1925 年の RI の発表によると、ロータリアンが自ら制定に関与して、正しく実行されている、全世界の企業の道德律は 145 に上ることが報告されています。

業界が採用した道德律の中で有名なのが、ガイ・ガンデカーが作ったレストラン協会の道德律です。若年労働者の深夜労働が当たり前だった時代に、現在の労働基準関係諸法や就業規則とまったく引けを取らないような規約を定め、更に職業倫理基準、接客態度、サービス、取引関係、同業者対策、行政との関係、こういったものを、こと細かく決めて、それを守っていったのです。1920 年から 1930 年にかけての 10 年間で、ロータリーの経営学に基づく奉仕理念が社会に大きな影響を及ぼした爛熟期といえます。



アル・カポネは、10代半ばでニューヨーク・マフィアのチンピラとなり、1910年頃からシカゴで勢力を伸ばしつつあったジョニー・トリオの片腕となったのは1919年、彼が20歳の時でした。1920年禁酒法施行と共に、マフィアは大きく勢力を伸ばしていきます。



アル・カポネ

ロータリーの奉仕理念が完成し、その理念をロータリアン企業が実践に移して、業界全体の倫理基準を高めようとして活動しだした時期と、マフィアの勢力拡大の時期が、期せずして一致したことは皮肉なことです。

禁酒法の施行されていないイギリス、特にスコットランドから密輸されてくる酒を取り締まるために、両国が協定を結んだのは、二国間の争いを未然に防ぐためにロー

タリアンが実践した、他国法を尊重するという国際奉仕の成果であるといわれています。

マフィアによって牛耳られていた映画産業を肅清し、さらに公開前にその内容を検討するために広報委員会を作って、映画の倫理規制を実施しました。禁酒法の影響を受けて、マフィアの影響力が強かったレストラン業界を、ガイ・ガンデカーが作った「レストラン協会の道徳律」を使って改革したことは、先ほど述べた通りです。

シカゴ・クラブ元会長ヘンリー・チャンバリン大佐をシカゴ市防犯委員長に任命して、マフィアの肅清にのりだして、1920年にはマフィアの息のかかった保釈保証人を告発したことや、シカゴ・クラブ元会長ローシュ大佐の活躍も有名です。連邦警察もエリオット・ネスを隊

長とする特殊部隊を投入して、ついに 1931 年に所得税法違反でカポネを逮捕し、翌年実刑 11 年の判決を受けて、アル・カトラスに収監されたことは、アンタッチャブルでおなじみの話です。ちなみに、カポネは若いときに感染した梅毒が悪化したため刑期半ばで釈放されたもののフロリダで廃人同様の生活を送り、1947 年に 48 歳でこの世を去ります。奇しくもポール・ハリスの逝去と同じ年でした。



profit を周りの人たちとシェアすることで自らの体質を改善して、大恐慌にも耐え得ることを実証し、さらに世に有用な職業を尊重し、自らの職業を通じて社会に貢献し、業界の職業倫理の高揚を求めてマフィアと対決しながら、みごとに勝利を勝ち取ったロータリーに対して、ロータリアンは当然のことながら、一般社会の人たちも大きな尊敬と賞賛を与えたことは明らかです。脱税、贈収賄、不公正取引、市場買占め、おとり商法、他国法無視、契約不履行、商標侵害、現在はそのほとんどが立法化されていますが、これらの不合理な商取引が公然とまかり通っていた時代に、これに敢然と立ち向かって、ついに立法化にまでこぎつけたのは、ロータリーの功績なのです。

しかし、この道德律は数々の的外れの理由をつけて、シェルドンがロータリーを退会した翌年の 1931 年に配布禁止となり、更に 1951 年には廃止となり、1980 年には RI 細則に細々と残っていた「道德律」という言葉も末梢されました。

これはシェルドンの影響をなるべく排除しようという、RI の意図的な考えによるものだと思います。

1914 年に RI 会長を務めたマルホランドは、社会的奉仕活動の実践こそロータリーの役割だと主張して、シェルドンの経営学に基づく奉仕理念とは異質な身体障害児対策に熱心に取り組みました。



マルホランド

その影響を受けて、ボランティア活動に生きがいを見出したグループが増えてきました。

経営学者としては著名な存在であったシェルドンも、ロータリーの社会では、クラブ会長すら務めたことのない、一介のロータリアンに過ぎません。元 RI 会長の強い影響を受けたボランティア派は、一気にその勢力を伸ばしていきました。

ボランティア活動を現すモットーが次から次へと生まれました。前述の「Service, not self」に続いて「Service before self」などの言葉遊びのようなモットーも出て、結局 1920 年に「He profits most who serves best」と「Service above self」が正式に二つのモットーとして使われることとなります。

この頃から、正しい経営学に基づいて事業を健全に運営しようとして、ロータリー運動に参加しようとする人は徐々に減少し、エリート意識を持ったボランティア活動派としてロータリーに在籍する人が増えてきました。

1917 年頃から Service, not self に代わって Service above self が頻繁に使われるようになり、1921 年の国際大会には Service, not self、Service above self、Service before self を廃止して、He profits most who serves best のみにしようという決議案が提案されましたが否決されています。

シェルドンは 1921 年のエジンバラでの演説を最後にロータリーとは完全に手を切って、それ以後は、自らのライフワークである経済人

の育成に没頭し、更に 1930 年には正式にロータリーを退会します。

1923 年には、Sheldonism 派と対社会的奉仕活動派との主張に決着をつける決議 23-34 が採択されますが、後者にとって大きな収穫は、Service above self に対して「他人のことを思い遣り、他人のために尽くす活動」というお墨付きを得て、双方がロータリーのモットーとして正式に認められたことです。

経営学者としてまた教育者として不動の地位を築いていたシェルドンにとっては、経済界の専門家が一様に高く評価している Sheldonism の理念について、素人集団に過ぎないロータリーの内部から批判を受けることの方が、不愉快きわまりないことであったと思われる。

予てから He profits most who serves best に反感を持っていたイギリスのロータリー・クラブ群は、この間隙について、1927 年のオステンド大会で奉仕活動の実践を容易にするために、Aims & Objects Plan に基づいた四大奉仕(後に五大奉仕)を採択させます。

ここで初めて職業奉仕という言葉が使われ、現在に至っているわけですが、これはシェルドンが述べた経営学上の奉仕理念とは似ても似つかぬものに急速に変化していったため、それ以降、職業奉仕とは何か巡って数々の混乱を起こすこととなります。1987 年に RI が発表した「職業奉仕に関する声明」の中の「クラブが行う職業奉仕」という文章についての論争が、いまだに続いています。



ウイル・メーニア Jr

1937 年のニース国際大会において RI 会長ウイル・メーニア Jr. は「誰かが奉

仕理念とは、他人のことを思い遣り他人のために尽くすことだと定義しました。「他人のことを思い遣り他人のために尽くすことを通じて、ロータリアンは自らの職業の規範を高めながら、国際理解と親善と平和を推進するために自らの地域社会に役立つように努力しています。」と述べています。

この文章からは、誰が最初に「他人のことを思い遣り他人のために尽くす」という表現をしたのかを推し量ることは不可能ですが、この説明は明らかに人道的奉仕活動を指すものと考えられます。

チェスレー・ペリーは 1954 年 3 月にタルサ・クラブで講演して「多くのロータリー・クラブが夫々の地域社会で行なっている社会奉仕活動の素晴らしい業績に加えて、ロータリー運動は全体として、ロータリーの会員になる人だけではなく、人類全体にわたって、他人のことを思い遣り他人のために尽くすという **ideal of service** が受け入れられ、実行されて行くものと信じています。」と述べています。



チェスレー・ペリー

このようにして、ロータリーの奉仕理念の主流はシェルドンの経営学に基づく奉仕理念から、徐々に対社会奉仕活動の理念に変わっていったのです。

RI が発行している Official directory「会員名簿」の最終ページ Brief history of Rotary には 「 Rotary clubs everywhere have one basic ideal - the “Ideal of Service”, which is thoughtfulness of and helpfulness to others すべてのロータリー・クラブは一つの基本的な奉仕理念を持っている。それは他人のことを思いやり、他人のために

The general objectives of Rotary clubs in every country are the same - the development of fellowship and understanding among the business and professional leaders in the community, the promotion of community-betterment endeavors and of high standards in business and professional practices, and the advancement of international understanding, goodwill, and peace. Rotary clubs everywhere have one basic ideal - the "Ideal of Service", which is thoughtfulness of and helpfulness to others.

役立つことである。」と記載され、「Ideal of Service 即ち奉仕の理想とは、人のことを思いやり、人の役に立つこと」と訳されています。

このことから、現在の Service above self は他人のことを思いやり、他人のために奉仕するいわゆる社会奉仕や世界社会奉仕の活動を推奨するモットーだと考えることができます。

このように、ロータリーが持っている二つの奉仕理念の内、Service above self は、その提唱者も、その本来の意味も分からないまま、人道的奉仕活動の理念に成長して、現在に至ったこととなります。



職業奉仕はロータリーだけが持っている特殊な奉仕理念だという人がいますが、これは大きな間違いです。

ライオンズにも立派な道徳綱領が存在しています。

1. 職業に対する不断の努力が正しく賞賛されるように心がけ、自己の職業の尊さを確信すること
2. 事業を成功させて、適正な報酬や利益は受けるべきであるが、自己の立場を不当に利用したり、人に疑われる行いをして自尊心を傷つけてまでも利益や成功を求めないこと
3. 事業を遂行するにあたっては、他人の事業を妨害しないように心がけ、顧客や取引先に誠実であり、自己にも忠実であること
4. 世人に対する自己の立場や行いに疑いが生じたときは、世人の立場に立って解決にあたること
5. 真の友情は損得の上に築かれるものでなく、心と心の触れ合いによるものであることを自覚し、手段としてではなく目的とし

て友情をもつこと

6. 国家および地域社会に対する公民の義務を忘れず、かわらぬ忠誠を言動にあらわし、すすんで時間と労力と資力をささげること
7. 不幸な人には同情を、弱い人には助力を、貧しい人には私財を惜しまないこと
8. 批評は謙虚に、賞賛は惜しみなく、建設を旨として破壊をさけること



He profits most who serves best

Service above self に比べると、He profits most who serves best は、その提唱者はアーサー・フレデリック・シェルドンであることと、その言葉の持つ意味もはっきり分かっています。

シェルドンが、このフレーズを最初に使ったのは、1902年にシェルドン・スクールのモットーです。

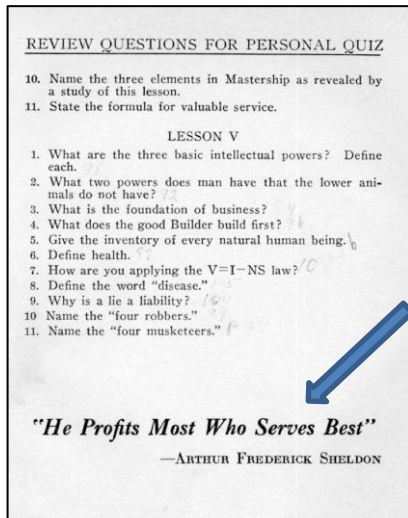
1904年に教科書として出版された「The Science of Business」の第5巻の文中には、「奉仕とは気心の知れない人から見れば異質なものです。彼は完全に利己的です。そして、He profits most who serves best というモットーが実行不可能な理想主義であると信じています。」という逆説的な記述で、このフレーズが紹介されており、このフレーズの持つ意味を直接的に説明している訳ではありません。

即ち、この教科書の文中にたまたま発見しただけのことであり、それ以前から使われていたことを否定するものではありませんから、今

は発見されていない1902年以前のシェルドンの文献にさかのぼって調査する必要があります。

さらに1902年から1946年にかけて発刊された「Sheldon Course」という12巻1500ページの教科書には、各巻の最後のページが、全てHe profits most who serves best という言葉で結ばれています。

今まで私たちが信じていた、He profits most who serves best とい



REVIEW QUESTIONS FOR PERSONAL QUIZ

10. Name the three elements in Mastership as revealed by a study of this lesson.
11. State the formula for valuable service.

LESSON V

1. What are the three basic intellectual powers? Define each.
2. What two powers does man have that the lower animals do not have?
3. What is the foundation of business?
4. What does the good Builder build first?
5. Give the inventory of every natural human being.
6. Define health.
7. How are you applying the V=I-NS law?
8. Define the word "disease."
9. Why is a lie a liability?
10. Name the "four robbers."
11. Name the "four musketeers."

"He Profits Most Who Serves Best"
—ARTHUR FREDERICK SHELDON

うモットーは、シェルドンがロータリーのために考えついたり、偶然シカゴの散髪屋で思いついたりしたフレーズではなく、ロータリーが創立するよりかなり以前の1902年には、既にシェルドン・スクールのモットーとして使われていたフレーズであり、それをロータリーが借用していたに過ぎないという事実が分かりました。

シェルドンは経営学を学生に教える過程で、当時は不要な物を騙して押しつける、世の中でもっとも卑しい職業と蔑まれていたセールスマンの仕事を、経営学という学問に則って、奉仕の実践を前提にした、継続的な利益をもたらす顧客を確保する活動であると定義づけました。それを分かり易く説明するモットーとして、**He profits most who serves best** を発表したのです。

このモットーはロータリーの職業奉仕という概念が生まれる前、いやロータリーが生まれる前に作られたものですから、ロータリーの職業奉仕を表すオリジナルなモットーではありません。その後の変遷で、ロータリー全体の奉仕理念を表すモットーとして使われだし、ロータリーに職業奉仕という概念が生まれた1927年以降、職業奉仕のモットーに変化して定着したことになります。

